

センター通信

延辺調査備忘録(下)

稲賀 繁美

六(承前)[※]

さて、筆者が今回、龍井地域の現地調査を思ったったそもその理由は、きわめて個人的なものである。筆者の祖父、稲賀襄は一九四三年九月一日付けで、龍井高等女学校に赴任した。それまで存在した光明女学校と併合し、これを龍井女子国民高等学校へと改組し、これに並んで、間島女子師道学校を立ち上げるのが、その主たる業務だった。だが日誌を見ると、着任早々から自分の任期は一年二ヶ月と決め、健康上の不如意を理由あるいは口実として、早々に離任手続きを取

る決意をしていた。そして、離任予定日当日の、一九四四年一月一二日朝に、朝礼で別れの挨拶をする直前、宿舎の前の庭石に腰を下ろしたまま、心臓発作ないし脳溢血のため急逝した。その祖父の故地を訪ね、祖父の置かれていた状況をいささかなりとも理解したい、と願っての旅だった。

幸い、今回の一週間足らずの調査で、襄が作詞・作曲した龍井女子国民高等学校の校歌の曲を採録することができた。先に触れた金美源さんが、歌詞を見てただちに曲を思い出し、歌って聞かせてくださったからである。それとともに、光明高等女学校の校舎の写真も、同窓会名簿に掲載されたものを複写することができた。さらに当時、毎日のように歌われていたという寄宿学寮の歌も発掘できた。これまた金さんが、インタビューの席上で不意に思い出してくださったもの

だった。加えて、前身である光明高等女学校時代の校歌も、ハルモニは歌詞を心覚えの手帳に書き込んでおられ、二日後に再会の折、節をつけて、この歌もたっぷりと聞かせてくださった。

これらの歌詞の詳しい分析にはまた場所を改めたいが、校歌は「あまてる神の宮居のほとり／丘の森に立てる学園（まなびや）／朝夕（あしたゆうべ）に仕へまつりて／瑞垣のうちなる我らが幸」と始まる。二番と四番に計二箇所現れる「皇国」を「中国」に改めさえすれば「光復」後にも立派に通用する歌詞であるとも見ても、必ずしも身内の身びいきとばかりは言えない。とりわけ寄宿寮の歌には、政治的な含意はほとんど読み取りようがない。「感謝の夜明けだお掃除だ／おいしいご飯を作りましょう／室はわが家・寮は村／家を明るくいたしましょう／今日も皆で朗らかに／村を明るくいたしましょう。」政治性を表面的に払拭した歌詞は、それだけに却って罪作りだとする解釈は容易だろうが、当時一〇代後半の女子生徒の記憶に、これらの歌詞がいまなおくっきりと刻まれ、文化大革命の試練を越えてもなお保存されている例のあることに、むしろ畏怖を抱くべきかもしれない。よきにつけ悪しきにつけ、教育のおそろしいまでの効能がここに

見られるからである。

七

当時の龍井はきわめて教育水準の高い土地だった。そして高等女学校に入学することは、今日の一流大学に入学するよりも、人口比率でいえば、はるかに狭き門だったという。それでも当時、龍井女子国民高等学校には、七〇〇名にのぼる英才が集っていた。こうした勉学環境がなければ、おそらくそのまま農民として一生を送ったであろう何人もの人々が才能を開花させ、その後まったく異なった人生行路を歩み、地域にそして新生中国の未来に貢献することとなった。日本支配下での教育の得失や政治的な善悪には、いまあえて踏み込むまい。裏は辞職に先立って、個人の日記に「今の様なそっかしい四角四面なやりにくい時に、私の健康と性格はびつたりこない」と、健康面の不安と時局への違和感を私的に表明し、「まるで出来ていない若い人達が査察とか何とかやって来たり、作った許りの学校を動かそうとするような、まるで目標のない行政の下に、真剣に良心的な教育は行えない」（日誌『跡』、昭和一九年七月一日）と、教育に対する理不尽な統制や口出しに不満を述べていた。とはいえこの人

物を、そうした心情ゆえに、植民地教育者としての責任から免責しようとは思わない。（なお龍井赴任に先だつ時期、稲賀襄は月刊誌『奉天教育』第七巻（康德六年〓昭和四年〓一九三九年）編集長を務めていたとの前歴をもつ「梅定娥氏の教示」。）

その祖父は、急逝する前々日の日誌に、龍井女高を去るに際して、「事務引継ぎを終わって」と記したのちに、手製の和歌を十首書き付けていた（一月一〇日）。日本人校長の思いがけぬ死去により急遽執り行われた、神式（出雲神道の）学校葬に際して、それらの歌が「龍井女高を去る歌十首」として印刷に付され、参列者に配布された。

そこには、所詮素人の駄作ながら、以下のような歌がみえる。それを順不同に取り上げる。

お茶くみに書類はこびに叱りてし子らの思ひ出皆なつかしき

入学の掲示にもれて泣きやまぬ乙女ありしがいかにしつらん

卒業のめでたき庭に咽ぶ子の乙女ごころもいとしかりけり

裏の遺品には、康德一一年すなわち西暦一九四四年の「東満総省立龍井女子国民高等学校新入生合格者名簿」というガリ版刷りの名簿が残されており、そこには一五〇名ほどの名前が列記されている。そして、帰去来の辞ではないが、ふるさとの田畑が荒れ、倒れた柵を修繕するために帰国すると告げた校長には、物資逼迫の時局にも関わらず、千本に達する釘が形見として届けられた。

千本の釘を かたみと贈りてし乙女七百 忘れ得ぬかも

子ら皆がひとりひとりに魂こめて 集めし釘ぞ我が家のため

教え子の心こもりて 今よりは 我が家の塀は動（ゆる）ぎ
なからん

故郷で畑作に従事して引退後を過ごす決心には、中風を病む病母への孝行という配慮もあった。

島作り倒れし塀を取めむと子らに告げつつ 学び舎を去る

年老いし母を守りて はるかなる教え子の幸 祈り暮らさむ

最後には、いささか時局向きの歌が混在している。だが「天つ神」は朝鮮の天空神ハムニムであつても構わない趣向であり、それは朝鮮ではキリスト教の創造主とも同一視されていた。また大正教養主義の修養の時代に自己形成を遂げたモダン・ボーイにとっては、神とは万物の根源に位置する生命の謂であつたらう。「日の本」も、そうした解釈へと開かれた語彙の選択であらう。



生徒の農作物収穫にたちあう稲賀裏
龍井高等女学校農場にて
1944年初夏

天つ神 あきつみ神のみ恵みに 今日あることを 忘るるなゆめ

床しさに強き力をつつみつつ 我が日の本の礎(いしづえ)となれ

「倒れし塀」とは、ほかならぬ自らの死を暗示する言葉となったわけだが、このとき、裏は享年、数えで五二歳であった。奇しくも、その祖父の没年と同年齢で終焉の地を訪れる機会を得た孫は、いまいささかなりとも、祖父の歩んだ道とその背景を理解しはじめている自分に気づく。そして祖父の辿った生涯を、八月六日には、延辺大学本部にて「東アジア文化研究へのあらたな展望…延辺戦前教育史の視点から」龍井高等女学校初代校長の生涯と足跡に照らして」と題して講演することを許された。とはいえ、それはなにも個人的な感傷を述べるためにしたことではない。むしろ奉職する国際日本文化研究センターの共同研究活動の紹介の一環として、あらたな学術上の方法論を提案する意図を込めて企てたことであつた。

八

国際日本文化研究センターの共同研究は、国際的・学際的・総合的研究を謳っている。日本近代の経験は近隣諸国に不幸を齎すものだった。しかしだからこそ、その実態研究には国際的な協働が不可欠である。さらにそれは、言語学や狭義の日本文学研究の枠のなかでは実現しえない。延辺という複教言語文化圏は、その境界性ゆえに日本侵略下にあつても、政治的・文化的に重い意義を担う結果となつた。その異文化接触の現場をなまなましく体現するのが、教育という制度であるならば、そこに歴史学の知識や地政学的な分析、さらには国際政治力学の作用を読み取り、これらの学際的なアプローチを総合してはじめて、広義の植民地経営への反省を紡ぐこともできるはずである。と同時に、延辺大学も援助をうけている国際交流基金の前身が、満洲国成立以降になつて結成された、国際文化振興会という外務省外郭の国策組織であつたことも、また想起されてしかるべきだろう。日本が「国際文化」という名のもとに進めてきた政策は、けつして政治的な臭さから無縁ではない。そうした過去への眼差しは、未来への警鐘ともなるはずだ。

たしかに偽「満洲国」の喧伝した「王道楽土」はまやかし

の美名にすぎなかつた。だがそこには未経験なまま「五族協和」の壮大なる実験にとりかかり、無料な失敗を験した痛切な体験が、負の遺産として残されているはずだ。それを禁忌として頬かむりしたり、あるいは総括して声高に糾弾して能事畢れりとする代わりに、その失敗の跡を具体的に見極める努力が、「脱植民地」を謳ういまこそ求められているだろう。国際日本文化研究センターというきわめて小規模の研究所において、この主旨にそつて東アジアの近代を問い直す共同研究プロジェクトが複数進行中である。西欧近代の語彙や思想さらには社会制度がいかに漢字文化圏・儒教社会に受容され変容されたのかを、国際的な共同作業で解明しようとしている鈴木貞美の研究班、中国東北部・旧満洲地域の文化史の問い直しと再構築を目指す劉建輝班。その驥尾に付して、筆者はアジア概念が如何に西欧とそれ以外 (the West and the Rest) の相関のひとつの変数として分節されてきたかの批判的検討を試みている。

九

延辺地域での今回の現地調査(二〇〇九年八月四日〜九日)は、わずか数日のきわめて小規模の初歩的作業にすぎな

い。だがそれが、国際的な視野にたち、東アジアのなかでの日本研究を進めるうえで、ひとつの里程票あるいは、最初の礎（「日の本の礎」）となってくれることを、筆者としては願わずには居られない。当講演への講評で権宇院長も正当に指摘されたとおり、文学研究とは、印刷されたテキストにのみ没入していればよいものではない。歴史人類学的な現地でのフィールドワークを起点として、歴史資料を今に蘇らせ、その時代と社会とを浮き彫りにする行為のなから、延辺の日本語文学の様相が、中国語や朝鮮語との鬩ぎあいのなかに、くつきりとした姿を取り結ぶことになるのだから。

講演を行った八月六日は、奇しくも、広島に原爆が投下されてから六四回目の記念日にあたっていた。裏は広島高等師範学校を卒業し、熊本に赴任したのについて、関東洲大連を皮切りに旅順、奉天、北京と大陸での教育に生涯を捧げた。その没後わずか九ヶ月を待たずして、裏もよく知っていた市内相生橋たもとの産業奨励館は、爆心地の象徴たる原爆ドームへと変貌を遂げることになる。同じ町の広島高等学校に一九四四年に入學したその息子の敬二は、二年生であったがゆえに被災地の救助活動も早々に免除され、市外への脱出を命じられた。そのお陰で致死量の放射線被曝を免れ、一七歳

の父は辛くも生還した。そしてこの敬二が生き延びることがなかったならば、いま延辺でその息子がこうして祖父に関する講演をする機会もなかった筈、ということになる。

祖父への最低の義務を、六五年後になって、祖父の終焉の地でようやく果たせた。そんな安堵とともに、祖父の生きた時代を知るための努力は、いま始まったばかりなのだ、という自覚も、延辺を訪れてみてようやく芽生えてきた。祖父は没する前日にいたるまで、生涯に計五八冊の日誌を残している。龍井での日々の出来事や所感も、一日も休まず書き留めている。それを詳しく読み直して、等身大の経験へと還元する作業は、筆者の今からの残された人生における課題のひとつとなるだろう。個人の人生という縦糸のあいだに歴史的な事件という横糸を通して生地を仕立てる作業。それは個別の *life history* に普遍的な次元を授けるとともに、逆に個々の歴史的事件に、それに接した人々の感情の深みと振幅とを丹念に肉付けしてゆく作業でもある。その縦糸と横糸との織り目のなかに、歴史を生き直す、わずかな可能性も少しずつ拓けてゆくのではなからうか。

思えばそれは、祖父や父と同郷、山陰の境港に生を受けた隣人、水木しげるが『コミック昭和史』で採用した手法と、

なんら変わるものではない。その水木しげるの祖父に、筆者の曾祖父、稻賀恵四郎は一編の漢詩を献じている。また近年文化勲章を受章して、いまや故郷の「水木ロード」でも著名なこのマンガ家の両親、亮一・琴江夫妻は、筆者の祖母・きくのと近所付き合ひのある、小学校以来気心の知れた同級生だった。幼少の日の夏休み、昼寝から眼覚めた祖母の家に、武良夫妻が次男坊による『カッパの三平』『地獄の鬼太郎』ほかのマンガ近作を手に、ひょっこり訪ねてきた。その日の有様が、昨日の出来事のように鮮明に思い出される。

筆者にこうした生涯の記念となる稀なる機会を提供し、講演を主催して頂いた延辺大学日中韓語言文化研究所・所長の李東哲先生、外国語学院院长の権宇先生はじめ、日語系主任の孫雪梅博士、金永洙副教授、安勇花博士、徐瑛博士ほかのすべての皆様に、あらためて御礼を申し上げます。また筆者を延辺での調査へとお誘いください。滞在中、文字と朝から晩まで付き添って手配方を整えてくださった、新潟産業大学の金光林教授と、そのご親戚の皆様、深い感謝の意を捧げたい。金光林

さんは、すでに病重いなか、筆者の調査の下準備を整えておいてくださった長兄、金京麟氏の急逝の悲しみのなかで、筆者の調査を手助けしてくださった。その恩誼には応えるべき言葉を知らない。また著者のインタビューに快く賛同され、聞き書きの公表にも同意された、陳国清、金姬淑、金美源の皆様に加え、金光林さんのご親族の皆様、さらに録音の手助けをしてくださった、UCLA社会学教室博士課程学生の金載恩さんにも、篤く御礼申し上げます。

* 本編は科学研究費補助金「東アジアにおける文化交流と知的システムの近代的再編成」による海外出張報告「中国・延辺地区における近代東アジア文化交流と知的システムの再編に関する調査」の報告書の一部をなすものである。

** 問題の漢詩は、「懷武良君」（作品番号四）として、Judith N. Rabinovitch and Timothy R. Bradstock, "Paulownia Leaves Falling: The Kanshi Poetry of Inga Nampo (1865-1901)," *Japan Review*, No. 21, 2009, p. 59 に英訳とともに収められている。

（国際日本文化研究センター教授）

日文研 四十六号

二〇一一年(平成二三)年三月三十一日発行

編集 瀧井 一博

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社